

キャリア
の軌跡
第42号

初期臨床研修病院に 長崎大学病院を 選んだ理由を聞きました！

ココを
チェック!!!



マッチングの理由、第1位は
「熱心な指導医がいること」!!!

※長崎大学病院で研修中の研修医96人中
70人の先生にご回答いただきました。

昨年度の長崎大学病院の研修
医70人に、本院を選んだ理由
を聞きました。ココでは先生方
からいただいた生のコメントを
深〜く読み込んでいきます！

指導医について

「バックアップ体制がとっても厚いです」

医療教育開発センターの専任指導医、各医局の指導医、メンターと3方向から研修医をサポート。研修の進捗状況からメンタル面まで頼れる存在がそばにいます。

「研修医を育てよう！と考えている先生が多い」

本院では優秀な指導医を育成するため、毎年「厚生労働省認定指導医講習会」を開催。平成25年度は約80名の医師が受講しました。熱い指導医が日々、増加中です。

「事務スタッフのフォローが行き届いている」

研修に打ち込める環境を整えるため、事務作業をフォローするコンシェルジュが常駐しています。日々を支える「縁の下の力持ち」です。



環境について

「とにかく、研修室がキレイ！」

研修医室は2010年に新築されたばかり。仮眠室やリラックスペースがあるほか、アメニティも充実。

「シミュレーション設備が整っている」

研修医室そばのシミュレーションセンターには約80種のシミュレータがあり、24時間いつでも利用できます。

「研修診療科を自由に選べるし、 途中変更もでき、満足のいく研修ができる」

研修科は1カ月前までの申請で変更可能です。

「コースが充実している」

基本プログラムには、感染症コース、外科ハブコース、内科特化コースなど1年目からスペシャリストを目指すコースを設けています。

研修プログラムについて

そのほか、研修1年目を終えた感想を聞きました

長崎大学病院を研修病院に選んだことは人生で最大の成功でした!!!

まだ消化不良だが、刺激のある日々を送れている。

大学病院の堅苦しいイメージと違って、とても楽しい研修1年目でした。

不安なところもまだまだ沢山あるが、それなりに成長して自分の理想の医師像に近づけました。

全国で注目のプロジェクト

救急医療教育室が

長崎大学病院に誕生!!!

本院では2014年4月から初期・2次救急症例を指導する研修医のための専門部署を開設します。初代室長に就任する長谷敦子先生に、特徴や研修医に何を学んでほしいかなどをお聞きしました。

Q. 救急医療教育室の注目点はどんなところですか？

一般的に大学病院の救命救急センターは緊急度や重症度の高い患者さんを中心に診療する3次救急を受け持っており、「重症救急患者の対応から救急の基本を学ぶこと」については大変満足していただいています。しかし、救急医療システム上、初期・2次(軽症・中等症)救急の患者を基本的に受け入れていないことが多く、「あらゆる救急患者のファーストタッチを数多くこなす」ことには応えきれないのが現状です。

一方、初期・2次の患者を主に受け入れている市中病院の救急外来では、たくさんの症例を診ることができます。しかし、現在の臨床研修制度では市中病院で救急外来診療をローテートする機会は多くありません。また、専門化や慢性的な医師不足から、救急医療に対する教育体制が万全ではないことなどの課題もあります。

そのような、相互の特徴を活かし、課題を補い合う仕組みが、新しくできる「救急医療教育室」です。研修医の先生方は、大学病院で3次救急を、市中病院で初期・2次救急症例を経験できるようになります。

Q. 具体的にはどんなシステムなのでしょう？

済生会長崎病院と長崎記念病院に協力をお願いします。済生会長崎病院では、長崎大学病院救命救急センターをローテート中の研修医が私と一緒に輪番日の当直勤務をします。長崎記念病院へは地域研修枠の中で救急患者外来の勤務に入っていただきます。その際、私も長崎記念病院へ行き、指導にあたります。

どちらの病院も、一晩に10台程の救急車の搬入があるでしょう。また、インフルエンザなどが流行する季節にはウォークインでこられる患者さんの数もさらに増えると思います。あらゆる症例に接することができます。



←ICLSコースやジャンプOSCEなどで研修医の指導にあたってこられた長谷先生。若手女性医の憧れの存在です。

Q. 研修医の先生方には何を学びとってほしいですか？

自分たちの裁量の範囲内でファーストタッチをして、丁寧な診察と問診から、どんな検査をすべきか、どう治療するかというプロセスを見つけ出す面白さ、充実感、そして決断する責任感を味わってほしいですね。もちろん上級医が付きますので安心して臨んでください。

また、初対面の患者さんの要求に応えられるコミュニケーション能力を養う場でもあります。何を目的に来院したのか、パソコン画面を見たままで話をしたり、検査結果ばかり気にしては、その問題を見抜けません。患者さんとのコミュニケーションは毎日が一本勝負。体験するほどに引き出しは増えるでしょう。

さらに、たくさんの軽症例にまぎれてくる重症例を見つけ出せるようになってほしいですね。もちろん、最初は一筋縄ではいきません。ですから、直接診た症例だけではなく、たくさんの先輩医師や他職種スタッフと触れ合い、経験談を聞いてほしいですね。聞く経験も非常に重要です。そう考えると、研修医の先生にとって市中病院の救急外来勤務は学びの宝庫といえるでしょう。

長谷 敦子 教授

長崎県生まれ。長崎大学病院救命救急センターの副センター長・准教授を務め、2014年4月から同室長に就任、教授となる。

資格 日本麻酔科学会指導医/日本救急医学会指導医、日本蘇生学会指導医/JATEC インストラクター及びインストラクタートレーナー/DAM インストラクター/ICLS コースディレクター